編集室

赤ちゃんからのメッセージ

赤ちゃんが生まれてからの最初の1年間を乳児期と呼んでいる。この時期は一生のうちで心と体が最も発達する時期であり、将来の心の基礎づくりには非常に大切である。

胎児期から乳児期は喜び、安心、怒り、不安、恐怖などの情動を司る大脳辺縁系の発達が主で、この時期に経験した感情は「表象（写真）」として「心の引き出し」にしまいこまれる。幼児期になって新皮質が発達し、大脳辺縁系をコントロールするようになると、「心の引き出し」にしまいこまれた多くの感情は表面には現れない。しかし、将来、困ったことに出合った時、心の中の表象が現れる。これを内的ワーキングモデルという。

乳児期に温かい養育環境の中で育ち、周りの大人から常にポジティブな感情を与えられた赤ちゃんは、「心の引き出し」に多くの温かい情動を表象としてしまいこんでいる。そして、「大人は私のことを分かり、いつも助けてくれる存在である」という心の安全基地を作り、自分に自信を持つことができる。一方、大人が子どもの愛着行動を無視したり、疎ましく感じて腹を立てたり、拒絶するなどの不適切な養育環境におかれた赤ちゃんは、「自分は保護される価値のない存在である」という自信のない自己像を作り、混乱した心の基礎ができ上がると言われている。

情動のやりとりにはコミュニケーションが必要であり、その中で相手の気持ちや意図を読む能力を「間主観性」と呼んでいる。人間の持っているコミュニケーションの手段には「ことば」「文字や記号」「表情や行動」などがあるが、ことばや文字を理解できない赤ちゃんは周りの大人と表情や行動などの限られた方法でコミュニケーションをしている。

お母さんが語りかける「○○ちゃん、いい子ね」という言葉。赤ちゃんは「いい子」という「理性の情報」は理解できないけれど、お母さんの声のリズム、ピッチ、メロディー、抑揚にこめられた優しい心は「感性の情報」によって理解できるとTrevarthenは述べている。お母さんの声のリズムや音色によって直観的にお母さんの気持ちを察する赤ちゃんの能力を「一次的間主観性」という。

赤ちゃんと上手にコミュニケーションをとり、赤ちゃんからのメッセージを受け取ることができるお母さんは、子どもの「愛おしさ」を再発見し、なにより自分の心地よさの中で、赤ちゃんを育てる力につながる。また、赤ちゃんにとっては「愛されている」という心の安定につながる。母子の絆が深くなれば、さらに上手にコミュニケーションをとることが可能となってくる。

近年、児童虐待や子どもの自殺が急増している。児童虐待は平成12年5月に通告が義務となって以降、平成20年には4万人を超えた。虐待者は実母が62%と最も多く、次いで実父の22%と、8割以上が最も大切にしてくれるはずの大人からである。

赤ちゃんは決して多くのことを望んでいない。優しく微笑みかけ、そして、「あなたはママとパパの宝物」としっかり抱きしめてほしいだけである。

私たち大人は赤ちゃんからのメッセージを受け取る感性を持つべきである。

（林谷　道子）

広島県医師会速報　2012年(平成24年) 3月5日
●発行所／社団法人　広島県医師会
〒733-8540　広島市西区観音本町一丁目1番1号　TEL.082-232-7211　FAX.082-293-3363
広島県医師会HP　http://www.hiroshima.med.or.jp/　E-mail　kouhou@hiroshima.med.or.jp
●編集者／広島県医師会長　碓　井　静　照
●印刷所／レタープレス株式会社
〒739-1752　広島市安佐北区上深川町809番地の5　TEL.082-844-7500　FAX.082-844-7800